

[学術論文]

芸術活動、教育、観光業：  
マレーシア、サラワク州のある手工芸品制作者の  
ライフヒストリー

Art Activity, Education and Tourism Business:  
A Life History of a Handicraft Maker in Sarawak, Malaysia

市川 哲

Tetsu ICHIKAWA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 28号

2017年7月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN

JULY 2017

〔学術論文〕

## 芸術活動、教育、観光業：

マレーシア、サラワク州のある手工芸品制作者の  
ライフヒストリー

### **Art Activity, Education and Tourism Business: A Life History of a Handicraft Maker in Sarawak, Malaysia**

市川 哲

**Tetsu ICHIKAWA**

1. 問題の所在
2. 手工芸品制作者のライフヒストリー
3. 手工芸品の制作と販売
4. 考察：芸術活動、教育、観光業

参考文献

要旨 本稿はマレーシア、サラワク州における手工芸品を制作する先住民男性のライフヒストリーを紹介することにより、従来のエスニックな手工芸品を対象とする観光人類学的・観光社会学的な研究が依拠してきた前提の一つを再考することを目的とする。観光の場で販売されるエスニックな手工芸品に関する先行研究の多くは、外部社会出身のゲストと観光地の当事者であるホストの相互交渉によって、これらの手工芸品が創造される側面を重視する傾向があった。これに対し本稿は、ある手工芸品制作者のライフヒストリーを追うことにより、観光の場で販売されるエスニックな手工芸品の特徴を、観光とは直接関係ない社会的背景の中にも位置づけて理解する。本稿が紹介する先住民男性は生まれ育ったロングハウスではなく、外部社会で働きながら手工芸品制作の技法を学び、また本業の傍ら配偶者とともに芸術活動の一環として手工芸品を作成し、それを観光客にも販売している。以上の事例の紹介と分析を通し、本稿は従来の観光研究が陥りがちであった、観光の文脈を過度に重視することによってエスニックな手工芸品の制作と販売の特徴を理解する視点を避け、手工芸品およびその制作者を、彼ら彼女らを取り巻くより広い社会的背景の中に位置づけて把握する方向性を提唱する。

キーワード：マレーシア、サラワク、エスニックな手工芸品、観光土産、ライフヒストリー

## 1. 問題の所在

本稿の目的はマレーシア、サラワク州ミリにおけるある現地の手工芸品制作者のライフヒストリーを紹介することにより、現在のサラワク州各地で販売されている手工芸品の制作の背景の一端を描き出すことを目的とする。同時に、手工芸品制作者のライフヒストリーの中に、サラワクの社会史がどのように反映されているのかを見て取ることを試みる。

東南アジアにおけるエスニック・アート (ethnic art)<sup>1</sup> と呼ばれることが多い土産物を対象とした観光人類学的あるいは観光社会学的な研究には、これらの地域における土産物を西洋諸社会とは異なる地域の文化を表象する存在として捉えたり、西洋近代とは異なる感性によって生み出された美術として理解したりする態度を批判するという問題意識がしばしば存在する。このような研究は当該地域における観光土産や手工芸品を過度に他者化・本質化して捉えるというオリエンタリズム的な態度を批判するという問題意識に基づくものであるといえよう (e.g. Hume 2014)。また、観光の場で販売されるエスニックな土産物が本来の文化的文脈から切り離されて販売される側面に注目する、いわゆる文化の商品化に注目する研究もなされてきた (e.g. Cohen 1988, Smith 1989, Hitchcock, Nguyen & Wesner 2010)。さらに、近代になり西洋を代表とする他者との交流が増加し、在地住民が他者の視線を内面化する過程でこれらのエスニック・アートが生み出された、という側面を強調する研究もなされてきた (e.g. Picard & Wood 1997, 山下 1999, Adams 2009)。観光の場における文化の動態を対象とする観光人類学的な研究や観光社会学的な研究にとっては、特に以上のような問題意識に基づいた研究がなされることが多かったといえる (e.g. Hitchcock, King and Parnwell 2009)。

本稿は、このようなエスニックなイメージの表象に関する問題や、エスニックな観光土産が他者との相互交渉の中で生み出されるという観光人類学的・観光社会学的な視点を参考にしながら、これらの研究がはらむ観光という文脈を過度に重視する姿勢を避けることを試みる。従来の観光と文化の関係を対象とする研究の多くは、観光の場における外部社会と観光地の在地社会との交流によって生成される異種混濁的な文化の誕生に注目する傾向があった (e.g. Picard & Wood 1997, 山下 1999, Cave et al 2013)。このような、観光の場におけるホストとゲストとの相互交渉と、それによる他者との交流が生み出す観光文化の誕生に注意を払う研究は、観光の場における文化の動態を研究対象とする可能性を開いたことで、観光研究に対し重要な貢献をしたといえる。しかしながら、観光の現場をホストとゲストの相互交渉による新たな文化の生成という観点のみから説明する議論の進め方は、観光地の住民とその外部者との二者関

<sup>1</sup> 本稿が扱う、いわゆるエスニックな土産物は、エスニック・アート (ethnic art) 以外にもツーリスト・アート (tourist art) や単に手工芸品 (handicraft) や土産物 (souvenir) という用語により研究されることもあるが (e.g. Graburn 1999, Winter 2009, Wherry 2008, Hitchcock, Nguyen & Wesner 2010)、本稿では用語法の混乱を避けるため、特にこだわらない限りは「手工芸品」あるいは「エスニックな手工芸品」という用語で記述することにする。

係という枠組みを過度に重視して個別の事例を分析してしまう恐れがある。現実の観光の場では様々なアクターが様々な背景の中で相互に交渉し合い、複雑に絡み合いながら観光文化を生み出している。そのため、個別の観光の場における文化の動態を理解するためには、様々なアクターの活動や、彼ら彼女らが置かれる背景を単純化して捉えず、現状に即し具体的に理解する必要がある<sup>2</sup>。

また当然のことではあるが、観光地の住民や、観光に従事している人々は、その生活のすべてを観光の場でのみ送っているわけではない。現実には観光業以外の生業活動に従事し、観光の場以外の社会活動や人間関係の中に置かれることが多い。観光の場における様々な現象やその中で生活する人物の生活世界を理解するためには、観光という文脈を過度に強調してその中でのみ理解するのではなく（cf. 久保 2014）、必ずしも観光とは関係がないように見える社会的背景も視野に入れて研究する方向性も必要とされる。

以上の問題意識に基づき、本稿ではマレーシア、サラワク州の都市ミリに居住する、ある手工芸品作成者のライフヒストリーを事例として紹介する。サラワク州はマレーシアの中でも域内に数多くの少数民族が居住しており、熱帯雨林内部の先住民の集落を訪問するエスニック・ツーリズムが主要な観光形態として存在している（e.g. Zeppel 2006:262-267, Bratek, Devlin & Simmons 2007）。またこのような観光状況を受け、サラワク各地では先住民の伝統的な衣装や装飾品等をモチーフとした様々な手工芸品や、エキゾチックなイメージを前面に出した観光土産が各地で販売されている（e.g. Munan 1989, 2005, Berma 2001）。このような手工芸品や観光土産は必ずしも現地の先住民が制作したものとは限らず、州都クチンの工場で作られたものが卸売業者を通じてサラワク州各地に流通し販売されたり、隣国であるインドネシアからもたらされたりするものもある。だがこれら手工芸品の中には現地の人々によって作成される場合もあるし、このような伝統的な手工芸品の作成を得意とし、それをビジネス活動に結びつけている人々もいる（市川 2014）。

本稿では上述のような先住民のイメージを表象するデザインの手工芸品を制作する、ある先住民男性のライフヒストリーを紹介する。本稿では前述したように、彼のライフヒストリーの中で必ずしも観光とは関係ない部分も記述することとする。それにより、観光の場で販売される手工芸品やその制作の特徴を、観光の脈絡でのみ理解するのではなく、当事者をめぐる時間的な流れと様々な社会関係の中で把握することを試みる。それにより、観光の場で販売されるエスニックな手工芸品を、観光の脈絡にのみ限定してとらえるのではなく、より広い社会的背景の中で理解することを目指す。

---

<sup>2</sup> この問題については別稿で論じたことがある（市川 2014）。

## 2. 手工芸品制作者のライフストーリー

本稿で取り上げるのはサラワクに居住する先住民クニャー (Kenyah)<sup>3</sup>の50代の男性であるJS氏である。JS氏は現在、サラワクの都市ビントゥルの石油会社働き、通常はビントゥルで生活しながら、休日になると家族が暮らす都市ミリに戻って暮らすという生活をしている。彼の生活で特徴的なのが、石油会社に働くと同時に木彫や絵画、籐細工などの手工芸品を制作していることである。さらに彼は配偶者とともに、ミリ市内の手工芸品販売センターで彼ら夫婦が制作した手工芸品を販売している。この手工芸品販売センターはミリ市内で外国人観光客やマレーシア国内観光客、地元住民向けに各種の伝統的な手工芸品を販売する施設であり、*Lonely Planet* や *Rough Guide* 等の各種ガイドブックでも紹介されている観光施設でもある。本稿ではこのようなミリにおける観光施設で手工芸品の制作と販売を行っている人物であるJS氏のライフストーリーを紹介する。

彼は1960年にバラム川上流のTロングハウスで生まれた。JS氏の祖先は彼から数えて五代前の時に現在のインドネシア、カリマンタン領からTロングハウスのあるサラワク側に移住してきた。その際にJS氏の祖先は後述する青銅製の楽器やビーズをサラワクの移住先に持って来た。彼の家族はロングハウス内で有力者を出してきており、彼の父方の最年長のオジは1963年のマレーシア成立時<sup>4</sup>に政府によってロングハウスの長 (*tuai rumah*) として任命された。

JS氏は11人キョウダイの5人目として生まれた。JS氏の父はロングハウスで農業をしていた。彼は7歳の時に小学校に入学した。それまでTロングハウスには学校はなかった。JS氏の小学校入学時には、まだマレーシア政府はTロングハウスに学校を作ることはしなかったとのことである。JS氏の年長のオジはTロングハウスの代表者になる以前にはイギリス直轄植民地の外科助手 (*British Dresser*) として働いていたが、Tロングハウスより川下の町マルディ (*Marudi*) に行き、地方政府事務所ですべての手続きをしてTロングハウスに学校を作ることにした。ただしロングハウスの近くに学校を作る際には40人の生徒がいることが必須の条件だったとのことである。その時には学齢期の子供はTロングハウスには34人しかいなかったが、本来は小学校を卒業している年齢である13歳以上の子供も生徒にすることにして、なんとか40人の生徒がいることにして登録し、政府の援助を得て学校を設立した。このようにして作られたTロングハウスの小学校では生徒はすべてクニャーであったが、授業は基本的に英語を用いてな

<sup>3</sup> クニャーはボルネオ島の先住民である。クニャーはもともとボルネオ島のインドネシア領カリマンタンに居住しており、その一部がサラワク州に移住してきた。そのため現在のインドネシアのカリマンタン地域にもクニャーが居住している。

<sup>4</sup> 現在のサラワクにあたる地域は、もともとボルネオ島北西部のブルネイ王国の一部であったが、1841年よりイギリス人ジェームズ・ブルックが白人王 (*White Raja*) として統治するようになり、その後、第二次世界大戦中の日本軍による統治 (1941~1945年)、第三代目ラジャのヴァイナー・ブルックの退位 (1946年)、イギリスの直轄植民地統治 (1946~1963年) を経て、すでに独立していたマラヤ連邦、および同様にイギリス直轄植民地であったシンガポール、サバとともに1963年にマレーシア連邦の一部となった。

されていたとのことである。

小学校時代、JS氏は学校では成績が悪く、さらに彼は喘息があり身体が弱かったので、子どもの時はあまりスポーツしなかった。学校ではよく一チーム10人でリレーをしていたが、JS氏は走るのが遅かったので、いつも彼は女の子が走る番に充てられていた。ただ彼は小さい時から山刀やナイフ等の刃物を使って遊んだり細工をしたりしていた。JS氏によると、山刀がなくなると決まって彼のせいだと決めつけられ、よく怒られたとのことである。刃物の他にはピクニックが好きだった。当時のピクニックはコメと塩を持って出かけ、川で漁網を使って魚を獲り、それを川辺で料理するというものだった。ロングハウスの中には小さな雑貨店があったため、そこでナイロン糸を購入し自分で漁網を作ったとのことである。だがJS氏は幼少期には後に行うような手工芸品の制作に関することはほとんどしていなかった。せいぜいノートにペンで絵を描くぐらいであり、クニャーの伝統的なモチーフの絵画を描くこともせず、木彫等を作ることもなかった。

JS氏は小学校を卒業するまでTロングハウスで生活していた。小学校6年生になるまで町の店舗を見たこともなかったとのことである。彼の幼少期にはTロングハウスから一番近い店舗は下流のロン・アカ（Long Aka）という町にしかなかった。JS氏はTロングハウスを出て店舗のある町に出てみたいと思うようになり、それが下流の町にある学校に進学するために勉強しようというモチベーションになったとのことである。そのため彼は小学校6年生になると、中等学校に進学するテストのための受験勉強を始めた。当時、サラワクはすでにマレーシアの一部であったが、サラワク各地ではかつてのイギリス統治時代の教育制度に基づき、イギリス式の進学試験が実施され、初等学校で使用する教科書もイギリスのものであった。JS氏は母親に、早朝、鶏が鳴き母が起床する時に自分も一緒に起こしてくれるように頼んだ。そして早朝暗い中でケロシンランプの明かりのもとで勉強したとのことである。そのようにして勉強した甲斐があり、彼は進学試験に合格した。

試験には通ったが中等学校に進学するための資金の問題があった。彼はバラム川中流の町ロン・ラマ（Long Rama）の中等学校（Long Rama Government Secondary School）に進学することになったが、そのための学費として40リングギット<sup>5</sup>が必要であった。JS氏は父親とともに先ず下流のロン・アカに船で下って行った。当時、JS氏の父親はロングハウスの近くでゴムを植えていたため、父親はロン・アカでゴムとロングハウスから連れてきたブタを売ってお金を得た。Tロングハウスからロン・アカまでは船外機付きロングボート<sup>6</sup>で行く必要があったが、そのためには8リングギット必要であり、父親はそのための料金もロン・アカでゴムを売ること得る

<sup>5</sup> リングギット（Ringitt Malaysia）はマレーシアの通貨である。

<sup>6</sup> 現在、サラワク各地の河川で使用されているほとんどのロングボートはヤマハ等の日本製の船外機が使用されているが、JS氏の学齢期にはまだ日本のエンジンはなく、EvinrudeやJohnsonといったブランドのヨーロッパ製のエンジンを使っていた。JS氏によると、日本のエンジンが導入されるのは80年代になってからとのことである。

必要があったのである。

ロン・ラマの中等学校でも授業は英語を用いてなされていた。T ロングハウスの生徒は全員クニャーであったが、ロン・ラマの学校にはより広い地域出身の子供たちが生徒として進学して来るため、クニャー以外にもカヤンやクラビット、華人といった他の民族的背景を持つ生徒がいた。T ロングハウスの小学校では他にも四人の生徒が彼と一緒に中等学校への進学試験を受けたが全員不合格であった。そのため JS 氏は自分の成績は中等学校の一番下ではないかと心配し、中等学校では熱心に勉強したとのことである。その甲斐あって彼は良好な成績を収め、次の年からは上級のクラスに編入された。彼はこの学校に三年間在籍した。彼は学校の寄宿舎で生活し、平日は授業を受け、土曜日にはロン・ラマで日雇いの仕事をした。ロン・ラマの町中の商店を回り、「何か仕事ありますか」と聞いて回り、何か手伝える仕事がある場合はそれをしたとのことである。そのようにして彼は一日2リンギット程度の給料を得ていた。

ロン・ラマに在学中、彼は一年に一度クリスマスの時期にロングボートを乗り継いでT ロングハウスに戻っていた。そしてクリスマスが終わり、学校に戻る時期になるとロングハウスで父からゴム<sup>7</sup>をもらい、川を下って町でそれを売って学費にした。だが三年目のクリスマスの際に、ロン・ラマからT ロングハウスまでのボートの運賃が値上がりしたため、JS 氏はT ロングハウスに帰ることができなくなってしまった。そのため彼は年末の休暇中に学校の寄宿舎に一人で宿泊し、ロン・ラマで働きながら滞在する許可を取るために校長に相談に行った。だが校長は休暇中に誰もいない寄宿舎に生徒が一人だけにいるのはよくないと判断したらしく、知り合いが働いているバラム川流域の林業会社の伐採キャンプに連絡し、JS 氏が休暇中にそこで泊りがけで働けるように依頼した。

そのため休暇が始まった日に校長の知り合いのボート・ドライバーが JS 氏を伐採キャンプに連れて行くことになった。だがボート・ドライバーは間違えて彼を関係ない場所に連れて行ってしまったため、JS 氏は見知らぬ場所で過ごさねばならなくなった。JS 氏は捨てられていた古いヤカン拾い、川の水を沸かして飲んで一夜を過ごした。次の日、近くに伐採道路を見つけ、道路沿いにあった商店で持っていたお金で小さな袋入りのコメを買い、川岸で採った野生のゼンマイと一緒に料理して食べた。そうして三日ほど過ごしているうちに、たまたま通りかかったショベルカーの運転手が彼を正しい伐採キャンプに連れて行ってくれた。次の日から JS 氏は予定していた伐採キャンプで働くようになり、熱帯雨林の中で伐採するべき樹木を探すサーベイヤー (surveyors) とともに行動し、様々な道具を運ぶ仕事を担当した。この仕事は大変であったと JS 氏は述べる。ある時、サーベイヤーたちはジャングルの中で仕事をしている最中に酒を飲んでお互いに喧嘩し、皆どこかに行ってしまったことがある。そのため JS 氏は二日間、仕事道具とともに熱帯雨林の中のキャンプでサーベイヤーたちが戻ってくるのを待

<sup>7</sup> この時はおそらく JS 氏は父親がゴムの木から採取した樹液を乾燥させシート状にしたものを下流の街に持って行ったと思われる。

っていなければならなかった。この仕事が終わると JS 氏は給料として 175 リンギットを手に入れた。彼が 100 リンギット紙幣を見たのはこの時が最初であった。彼はこの給料をもってロン・ラマに戻り、学費を払って学校に戻ることができた。

JS 氏はその後も勉強を続け、さらに高等学校（form4）に進学することを目指した<sup>8</sup>。ロン・ラマで三年間勉強した後に、JS 氏は一時的に T ロングハウスに戻り、ゴムの樹液を集め加工して売り、それを学費にして、バラム川のさらに下流の町マルディの学校に入学し、そこで二年間学ぶことになった。ロン・ラマの学校と同様、マルディの学校にもイバンやカヤン、クニャー、クラビット、華人等、多様な民族集団の生徒がいた。マルディの高等学校でも英語を用いて授業がなされていた。マレーシアの国語であるマレー語に関しては日常生活でも少しは覚えたが、ロン・ラマの学校でもマルディの学校でも「基礎マレー語」(Elementary Malay) という科目があったため、それを通して学んだ。JS 氏はロン・ラマでもマルディでも異なる民族の生徒同士で話す際には英語とマレー語で会話をした。例えば JS 氏のロン・ラマ出身の華人の友人は、進学試験には落第したが、流暢な英語を話すため、現在でも JS 氏とは英語で会話するとのことである。

JS 氏はマルディでも仕事をしながら勉強した。この時にはマルディの学校の教師の家族が町から離れたところで暮らしていたため、JS 氏は教師の紹介で週末になるとその家族のために薪を拾ったり家畜の世話をしたりといった雑用をして賃金を得た。さらに長い休日になると沿岸の都市ミリに行き、工事現場で働いた。この時には JS 氏の父方のオバの一人がミリに住んでおり、JS 氏のために仕事を探してくれた。それ以降、長期の休みになるといつもその工事現場の監督のもとに行き仕事をさせてもらったとのことである。現在、ミリはサラワク州第二の規模を誇る大都市だが、JS 氏が働いていた際には現在よりも小規模であった。このようにして彼は 1977 年から 1975 年までマルディで勉強し、その間は一度も T ロングハウスには戻らなかった。

JS 氏はロン・ラマの学校にいた時もマルディの学校にいた時も、手工芸品の制作活動はしていなかった。ロン・ラマの学校では木工の授業はあったが、手工芸品の制作の授業はなかった。学齢期を通じて彼は特に手工芸品の制作活動はしなかった。

このように JS 氏はマルディで仕事をしながら勉強していたが、彼の弟妹たちも学校に入る時期になっていたため、さらに進学する機会があったものの、JS 氏はマルディでの勉強を 2 年で止めることにした。そのためマルディの学校での勉強を終えると、JS 氏は一旦 T ロングハウスに戻り、父親の仕事を手伝うことにした。主に焼き畑で働いていたが、焼き畑での陸稲の収穫が終わると、JS 氏はプナン<sup>9</sup>と交流するようになった。T ロングハウスの近くにはプナン

<sup>8</sup> マレーシアの学生は、日本の小学校にあたる 6 年間の教育 (Primary 1-6) が終わると 3 年間の中等教育がある (Form1-3)。その後、成績が優秀な学生は上級の教育課程 (Form4) で学び、さらに場合によっては大学や専門学校等に進学する。

<sup>9</sup> プナン (Penan) はサラワク州各地で狩猟採集生活を行う人々であり、JS 氏の生まれ故郷であるバラム川上流域各地でも動物の狩猟や各種森林産物の採集を行ってきた。

のコミュニティがあったからである。T ロングハウスの近くのプナンたちは 1970 年代から遊動生活をやめ、ロングハウスを建てて生活するようになった。焼き畑の収穫後、JS 氏はプナンの知り合いとともに熱帯雨林に入り、狩猟をするようになった。JS 氏はそれまで狩猟について学ぶ機会がなかったが、プナンとの交流により熱帯雨林の中での狩猟に関する知識を得ることができた。

T ロングハウスで六か月過ごした後に、JS 氏は再びミリに移り住み、仕事を探した。サラワクはすでにマレーシアの一部であったが、当時サラワクにおける教育制度は依然としてイギリスの教育制度を引き継ぎ、イギリス式の教育証明書 (Senior Cambridge) が発行されていた。JS 氏は証明書の発行を待ちながら工事現場で働いたり、木材を船や舢に積む仕事等をしてしていた。証明書を得ると JS 氏は小学校の臨時教員として働き始めた。そしてバラム川流域の小学校とティンジャール川流域の小学校でそれぞれ一年働いたのち、バラム川流域のロン・サン (Long San) という町の小学校で三年間働いた。彼はロン・サンの学校で働いている際に、正式な教員になるために教員養成校 (Teacher's Training Collage) で学ぶことを知り合いから勧められた。だが JS 氏が持っていた成績証明書にはマレー語の成績に関する記載がなかった。前述のように彼は学生時代に基礎マレー語の授業は受けていたが、より上級のマレー語の授業を受けておらず、上級マレー語の成績を証明することができなかった。この時期にはサラワクでもイギリスの教育システムではなく、徐々にマレーシア連邦政府の教育システムへと移行していたため、各種の資格や証明書でもマレー語の成績証明が求められるようになっていた。そのためマレー語の成績証明ができない JS 氏は教員養成校に進学することができなかった。

彼はロン・サンで働いている時にクニャーの女性と結婚した。配偶者の LL 氏は JS 氏が学校で働いている時期に、同じくロン・サンにあるカトリック教会で働いていた。彼女も JS 氏と同様、生まれ育ったロングハウスを離れてロン・ラマの中等学校で学び、卒業後はロン・サンで働いていた。二人は 1981 年に結婚した。結婚の際、JS 氏は LL 氏とともに彼女が生まれたロングハウスに行き、そこで結婚式を挙げた。午前中にロングハウスの教会でキリスト教式の結婚式を挙げ、同じ日の午後にはクニャー式の結婚式を挙げた。結婚後も JS 氏はしばらく臨時教員をして暮らした。彼らの長女の AJ は 1981 年に、次女は BJ は 1983 年にロン・サンで生まれた。

だが JS 氏は 1986 年に教師の仕事辞め、再びミリに移り住むことにした。ミリでの JS 氏の最初の仕事はミリ近郊のルトン (Lutong) という町での清掃業であった。この仕事をする中で JS 氏は一日 14 リンギットを得たが、ミリで借りた部屋の家賃は光熱費込みで 80 リンギットであり、生活は楽ではなかったとのことである。しばらく生活した後に、配偶者の LL 氏のオジがミリ市内のプジュット (Pujut) という地域のスクウォッター集落<sup>10</sup>に家屋を所有して

<sup>10</sup> マレーシアでは政府が所有する空き地等に不法に家屋を立てて生活する人々のスクウォッター集落が国内各地にある。マレーシアのスクウォッター集落は正式な住宅地ではないが、水道や電気といった基

いたため、彼ら一家は借家を半年ほどで離れ、そのスクウォッター集落に移り住んだ。このスクウォッター集落はミリ川のほとりにあり、現在でもイバンやクニャー、華人等が住んでいる。スクウォッター集落の近くまでは通常の道路が来ているが、集落の中は舗装されていない道があるだけである。このスクウォッター集落には JS 氏に移り住んだ 1986 年時点で水道は引かれていたが、電気は舗装道路沿いの家屋にしか来ていなかった。そのため舗装道路から離れた家屋に住むスクウォッター住民は自前の発電機を使用しなければならなかった。JS 氏が妻のオジから借りて住むことになった家屋は家賃を支払う必要なかったが、その家屋は窓もなく鍵のついたドアもないようなありさまだったため、JS 氏は平日には清掃会社で働き、週末になると家の修築をして暮らすようになった。初めはケロシンランプを使用していたが、後には発電機を購入して電気を使えるようになった。一年後の 1987 年になると彼は妻のオジからスクウォッター集落内の別の家屋を 3,000 リンギットで購入し、最初の家はオジに返し、彼ら家族はその家で暮らすようになった。

JS 氏一家が住んでいた家屋はミリ川の岸辺に杭を打ち、その上に建てたものであった。家屋のすぐ裏手は川であった。JS 氏はこのスクウォッター集落で暮らしている時期にボートを入手した。川の対岸には二次林があったため、彼はしばしばボートで川を渡り樹木を切り倒して得た木材を用い、自分の家屋を建てた。JS 氏はロン・ラマの学校にいた際に木工を習っていたが、そこで習った知識は基本的なものであり、実際の家屋の建築は試行錯誤しながら行っていた。

JS 氏は清掃業をしばらく続けた後、90 年代からある石油精製所で働き始めるようになった。この石油精製所で仕事をしている最中にある上司が彼の働きを認め、JS 氏に S という石油会社のスタッフにならないかと持ち掛けた。彼はその申し出を快諾し、S 石油会社の精製業務の監督者になり、石油精製に携わる労働者の監督をするようになった。転職後、JS 氏は初めはミリ近郊で働き、その後、サラワクの他の都市ピントゥルで働くようになった。

JS 氏は S 石油会社で働いているときに 4 人の子供を得た。三女の CJ は 1993 年に、長男の DJ は 1995 年に、四女の EJ は 2005 年に、五女の FJ は 2008 年にそれぞれ生まれた。JS 氏の子供はクニャーではあるが、全て華語（中国語）小学校で学んだ。華語小学校を卒業すると子供たちはマレー語や英語を使用する学校へと進学した。そのため彼の子供たちはクニャー語以外にも、華語、マレー語やイバン語を話すことができる。また JS 氏自身はクニャー語に加え、英語、マレー語、イバン語、カヤン語、プナン語を話すことができ、それ以外にもムラノウ語と福建語を少しだけ理解できるとのことである。JS 氏は学校で英語やマレー語を学ぶ以外にも、日常的に他民族の友人や知人と交流したり、ロン・ラマやマルディでの学校時代に福建語を話す華人の友人と交流したり、石油精製の仕事をするとムラノウ人の同僚と交流したりする過程でこれらの言語を覚えたとのことである。JS 氏は日常的な生活や交友関係により多言

---

本的なライフラインがあることがほとんどであり、JS 氏もこのようなスクウォッター集落で生活した。

語能力を身に着けたが、彼の子供たちはそれに加え、華語学校で正規の教育を受けることによりクニャー語以外の言語を習得した。

2006年にJS氏とLL氏はスクウォッター集落からミリ市郊外のプルマイジャヤ(Permyjaya)という住宅街に移り住んだ。JS氏が石油会社に転職し、ミリからビントゥルで働くようになってからも一家はスクウォッター集落で暮らしていたが、川岸の土壌が侵食され、家屋も古くなり、風が吹くと家屋が揺れるようになったため、市街地の建売住宅に引っ越すことにしたのである。現在に至るまで彼の家族はそこで生活し、前述したようにJS氏は自らが仕事をするビントゥルと家族が暮らすミリとを自動車で行き来する生活をするようになった。

### 3. 手工芸品の制作と販売

このようにしてJS氏は石油会社で働いて来たが、2003年から彼ら夫婦は手工芸品を販売するようになった。配偶者のLL氏のキョウダイと結婚した女性が、ミリ市政府が新たに手工芸品を販売するセンターを設立するという情報を得てLL氏に教えた。それを知ったJS氏はLL氏に、ミリ市の手工芸品販売センターに応募して自分たちが作った手工芸品を販売するビジネスを始めることを勧めた。JS氏はその時までにはクニャーの伝統的なモチーフを用いた木彫や絵画を制作しており、またLL氏もビーズ細工を作るのを得意としていたため、LL氏はミリ市政府の担当部局に応募した。応募に際してはJS氏とLL氏がそれまでに作った作品の写真を撮り、それを必要書類とともに関係部局に送ったとのことである。手工芸品制作の能力を証明するためである。その結果、LL氏は手工芸品販売センターで彼女らの作品を販売することが認められた。その後、JS氏とLL氏は手工芸品販売センターの中のストールを割り振られ、ビジネスを始めることが可能になった。現在に至るまで、LL氏は同センターの自分のストールで、彼女とJS氏の作品を販売し続けている。

上述のようにJS氏は現在、S石油会社で働き続けながら同時に木彫や絵画等の手工芸品の作成を行っている。だが彼が手工芸品を本格的に制作するようになったのは学齢期を過ぎてからであり、少年時代から行っていたわけではなかった。前述のように彼は子供の頃から山刀やナイフ等の刃物を扱うのが好きであり、またTロングハウスに住んでいた時には籐を使ってバスケットや魚籠を編む方法も習得し、クルブ(*kelebu*)という木の棒の先端を削った儀礼用の装飾品も作れるようになった。だがTロングハウスに住んでいた少年時代には、彼は手工芸品の制作は行っていなかった。

ただTロングハウスにはカロン(*kalung*)と呼ばれる、植物や人間、想像上の動物が渦巻き状に描かれるクニャーの伝統的な装飾的モチーフを用いた壁絵があり、JS氏は子供のころからそれを見ていた。またTロングハウスのカロンを描いたのはJS氏の母方のオジの一人であるが、実際に彼がその描き方について学ぶのは学校を終えてからである。

JS氏が学校を終え、臨時教員として働いた地域の一つであるロン・サンには、小学校の校舎や寄宿舎、教会の建物等の壁に多くのカロンのデザインが描かれていた。ロン・サンはバラム川上流域でも特にクニャーが多く住む地域であり、クニャーの伝統文化をよく見ることが出来る地である。JS氏はこれらのカロンに大変興味を引かれたとのことである。彼は臨時教員としてロン・サンで働きながら、暇な時には建物の壁に描かれたカロンを見て紙に書き写していた。彼はそのようにして書き写したカロンを、しばしばカロンを描ける彼のオジに見せてアドバイスを求めた。オジはJS氏にカロンの正しいデザインや、デザインの意味について教えた。JS氏はそのようにしてオジからカロンについて学ぶと、再び他のカロンを紙に書き写し、さらにまたそれをオジに見ることによってカロンの描き方を練習した。オジはJS氏にさらに多くのカロンを集めるようにアドバイスした。このようにして徐々にカロンに関する知識と描き方の技術を身に付けて行き、さらにJS氏は自分でもカロンのデザインの木彫をするようにもなった。JS氏は特定の誰かから木彫の方法を習ったわけではなく、自分で試行錯誤しながら習得したとのことである。JS氏はオジのアドバイスに従い、できるだけ多くのカロンのデザインを集め、オジに相談しながら多くの木彫を作れるようになっていった。

ミリに移り住み、石油会社で働くようになってからも、彼はカロンを描いたり木に彫ったりすることを続けた。特に彼はビントゥルの支社で働くようになってからは他の家族をミリに残して働く単身赴任になったため、通常の仕事が終わってから自宅で作成活動をする時間がとれるようになったとのことである。さらに石油会社で働くようになってからは、木彫だけでなくカロンのデザインを用いた水彩画やアクリル画も描くようになったとのことである。カロンに代表される伝統的なモチーフを用いたJS氏の制作活動は、ロングハウスで生活していた時期や学齢期ではなく、都市生活をするようになってから本格化したのである。

このようにJS氏が木彫や絵画、籐を用いて編んだバスケットや魚籠等を好んで作る一方、配偶者のLL氏は主にビーズ細工が得意である。LL氏はバラム川上流域の支流流域のSロングハウスで生まれた。だがJS氏のTロングハウスと異なり、Sロングハウスには当時、学校がなかったため、彼女は初等学校に進学する時期からSロングハウスを離れ、下流の町ロン・サンのミッションスクールの寄宿舎で生活しながら学んだ。JS氏とLL氏によると、その学校には三人のヨーロッパ人の宣教師がいたが、彼女たちはボルネオ諸民族の伝統的なビーズ細工に興味を持っており、自分たちの生徒のためにビーズ細工のクラスを開いていたとのことである。LL氏も生まれ育ったロングハウスではなく、この初等学校のクラスでビーズ細工について学んだ。JS氏によると、当時ミッションスクールで働いていた修道女の中には、生徒たちにビーズ細工をさせるためにビーズ玉を準備し、生徒たちに提供していたとのことである<sup>11</sup>。こ

<sup>11</sup> 現在、サラワク各地では日本製のTOHOというブランドのビーズや、インドネシアや台湾、中国製のビーズが販売され使用されている。日本製のビーズはJS氏の幼少期である1960年代からサラワクで使用されており、インドネシア製や中国製のビーズはそれよりも遅く、比較的近年になってから販売されるようになったとのことである。JS氏とLL氏と同じセンターで働く50代のクニャー女性は、彼女の

のようにして LL 氏はロングハウスではなく、主に寄宿学校の授業でシード・ビーズ<sup>12</sup>を使用した手工芸品制作法について学んだのである。

また JS 氏は LL 氏にビーズ細工のデザインのために、前述したクニャーの伝統的なデザインであるカロンのパターンを伝えたとのことである。JS 氏がロン・サンで集め、オジからその意味やパターンを習ったカロンのデザインを、今度は LL 氏がビーズ細工のデザインとして利用するようになったのである。JS 氏によると、カロンのデザインのビーズ細工を作ったり、木彫をしたりする際には、あらかじめカロンのデザインに従った台 (*tentan*) や台紙 (*luan*) を作り、それに従ってビーズをつなぎ合わせたり、木を彫ったりするとのことである。この他にも LL 氏は JS 氏が作る木彫の装飾を手伝ったりしている<sup>13</sup>。

このようにして作るビーズ細工は小粒のシード・ビーズが用いられるが、JS 氏によると、彼が子供だった 60 年代からバラム川上流域のクニャーはすでに大粒のトンボ玉<sup>14</sup>だけでなく、シード・ビーズを使っていたとのことである<sup>15</sup>。JS 氏の子供時代だった 60 年代には、サラワク各地には川を行き来する行商人がおり、彼が生まれ育った T ロングハウスでは華人やマレー人、クニャー人の行商人が砂糖、塩、缶詰、菓子、衣服などをロングボートに積んでやって来たとのことである。これらの行商人はロングハウスに着くと商品を陳列して村人に売り、一晚ロングハウスで過ごし、次の日になると川を遡ってまた別のロングハウスに商売に行く、ということをしてきた。JS 氏によると、これらの行商人は決まった頻度でやって来たわけではないが、焼き畑の播種 (8 月) の時期と収穫の時期 (2~3 月) を避けてやってきたとのことである。この時期には村人はロングハウスを離れ、焼き畑で農作業をしているため、行商人がロングハウスを訪れても誰もいないからである。ロングハウスの人々は現金以外にも、ゴムやコメと交換することで商品を購入していたとのことである。また逆にロングハウスの人々がロングボートに乗って川を下り、自分たちが育てたブタやニトリ、ゴム、コーヒー豆等を下流の町で売るといふこともしていた<sup>16</sup>。ロングハウスの人々はこのような河川流域で活動する行商人や下流の町での商業活動を通してシード・ビーズを入手し、ロングハウス内でビーズ細工を作り始めていた。

---

幼少期からサラワクの遠隔地でも TOHO のビーズがあり、ポケットではなく糸に通したものがバラ売りされており、それを入手していたと説明した。

<sup>12</sup> シード・ビーズ (*seed beads*) とは小さい単色のビーズであり、植物の種子のように小粒であるためこのように呼ばれる。

<sup>13</sup> 例えば JS 氏はクニャーの手工芸品の一つである山刀の鞘や柄の装飾もする。その際に JS 氏は木製の鞘や柄に彫刻を施すが、クニャーの山刀には彫刻の他にも動物の毛を使用した装飾が付けられることがある。LL 氏はこの山刀の鞘についている毛の飾り (*se'*) を作り、JS 氏が制作する山刀に付けている。

<sup>14</sup> 大粒で複数の色彩をもつビーズは英語ではグラス・ビーズ (*glass beads*) と呼ばれ、日本では古くからトンボ玉と呼ばれてきた。ただしマレー語ではトンボ玉もシード・ビーズもマニック (*manik*) である。クニャー語ではビーズ一般を *ino* と表現するが、トンボ玉は特に *lukut alo* と呼ぶ。

<sup>15</sup> JS 氏が子供の頃は日本製のシード・ビーズは袋詰めされず、20~30cm 程度の糸にひとつつながりに通して、一本一本バラ売りされていたとのことである。

<sup>16</sup> T ロングハウスでは JS 氏が生まれる前から村人がゴムの木を植えており、60 年代からコーヒーを栽培するようになったとのことである。

JS 氏の少年時代のロングハウスでは現代とは異なりシード・ビーズの入手が困難であり、手工芸品の作成も限られていたとのことである。だが次第に工場製のシード・ビーズが普及し、遠隔地でも比較的入手しやすくなると、多くのサラワク先住民が使用するようになり、それに従ってシード・ビーズを使用した手工芸品も盛んに作られるようになった。このように、ビーズ細工はかつては限られた数のビーズを用いたものであり、現在のように盛んに作成されていたわけではなかった。また同時に、それまで顔料を用いて壁に描くか、木板に刻み込むことによって描かれてきたカロンのような伝統的な文様も、次第にビーズ細工により表現されるようになった。

JS 氏によると、現在のサラワクにおける先住民の伝統的な文様も、かつては現在とは異なる方法で描かれていたとのことである。現在、JS 氏が紙に書き写してカロンを学んだロン・サンをはじめとして、サラワクのほとんどの地域では多くのカロンは黒、黄、白、赤の油性ペンキで描かれており、特に黒と黄色が多用されている。だが JS 氏によると、かつてペンキの入手が困難であった時期のサラワクでは、現在のように黒と黄色を多用したカロンは少なかったとのことである。JS 氏が子供時代にはすでに T ロングハウスの人々もペンキを用いてカロンを描くようになっていた。だが JS 氏によると、ペンキの使用が一般化する以前には、T ロングハウスのクニャーたちは赤、黒、白しか使える色がなく、黄色は使っていなかったとのことである。彼によると、赤色の顔料は特定の果実から作られ、黒を描きたい場合にはタカロン (*takalung*) というラテックスのような樹液を塗った上に粉状の炭を振りかけて黒くしていた。白色の顔料は実際にはなかったため、模様を描く木板の地の色を白に見立てていた。このようにして、かつては先ず木の板の上にタカロンで模様を描き、それに炭の粉を振りかけて黒色の模様を表現し、さらに木の実から作られた赤色で模様を描いていた。そのため JS 氏は、かつてのクニャーが描くカロンの壁画や、表面にカロンが描かれることが多い盾の文様は黒色が多かったとのことである。だが現在では油性ペンキが使用されるため、クニャーの壁画や手工芸品の文様は黒と黄色を多用したカラフルなものになっている。

このように現在では壁画にせよ木彫にせよビーズ細工にせよ、油性ペンキやシード・ビーズが容易に入手できるため、これらの材料を用いて大量に制作され、またかつてよりもカラフルに表現されるようになった。実際に JS 氏と LL 氏が手工芸品販売センターの自らのストールで販売している商品の中にもシード・ビーズで作った細工が多くある。JS 氏が LL 氏に手工芸品販売センターで自分たちが作った手工芸品の販売を勧めたのも、LL 氏がビーズ細工が得意であるからだけでなく、シード・ビーズがミリ市内で容易に入手できるからである。現在では工業製品であるシード・ビーズが先住民の手工芸品の主要な材料になっているのである。また彼らのストールではシード・ビーズの手工芸品のみならず、トンボ玉でできたネックレスも売っているが、その数は多くなく、またそれらのトンボ玉もほぼ全てがインドネシアの工場生産されたものである。これはいわば、工業製品としてのビーズが大量生産され、大量に市場に

出回り、安価に入手できるようになったからこそ、「伝統的」な文様がそれまで以上に発達し、かつそれまで使用されていなかった領域でも使用されるようになったことを意味する<sup>17</sup>。

ただし現在でもシード・ビーズだけでなく、トンボ玉が使用される場面がある。前述のように JS 氏の曾祖父はカリマンタンからサラワクの T ロングハウスに移住した際に多数のトンボ玉を持ってきた。現在、T ロングハウスでは曾祖父の代から伝わるトンボ玉は火事で焼失するなどして数が少なくなっている。T ロングハウスの住民も通常のビーズ細工をする際には市販のシード・ビーズを使用している。しかし現在でも特別な機会ではシード・ビーズではなくトンボ玉が使用されている。代表的な機会が婚姻儀礼である。クニャーはカヤンとともにボルネオ先住民の中でも伝統的に階層的な社会を持つ人々であるが、現在ではこのような階層が日常生活で明らかになることはほとんどない。だが婚姻の際には現在でも階層ごとに異なる儀礼が行われることが多い。JS 氏が生まれた T ロングハウスでは四つの階層があり、1970 年代まではそれぞれの階層で婚姻の際には夫側から妻側に異なる種類のビーズが贈られていた。現在では T ロングハウスのほぼ全ての住民がキリスト教を信仰しているが、結婚式の際には教会でのキリスト教式の結婚式とともに、クニャー式の伝統的な婚姻儀礼も執り行っている。クニャー式の婚姻儀礼では新郎新婦やそれぞれの親族はクニャーの伝統衣装を着用するが、その際に参加者はトンボ玉のネックレスを身にまとい、また新郎から新婦への贈与品としてトンボ玉が送られるのである<sup>18</sup>。

このような婚姻儀礼をはじめとする場で使用するトンボ玉は、現在では次第に入手が困難になっている。ロングハウスの火事で焼失してしまうこともあり、また新たになに作られることもほとんどない。現在でもインドネシアにはトンボ玉を作る工場があり、そのような工場製のトンボ玉がサラワクにももたらされているが、サラワクにおける複数の手工芸品制作者の説明では、それらの品質は古いトンボ玉よりも劣るとのことである。

だが現在でもサラワク先住民は婚姻の際に、新郎の両親は彼にゴングや山刀とともにトンボ玉を与え、新郎はそれを新婦側に贈与している。そしてそれらの贈与品は夫婦が所有し、夫婦の子供が婚姻する際には再びそれが贈与交換の際に使用されることになる。このように現在でもビーズやゴング、山刀等は婚姻の際に欠かせない贈与品となっている。またクニャー式の婚姻儀礼を行う際には、いわゆる伝統的な衣装を身に着けるが、この際に使用する伝統衣装も近年ではシード・ビーズで装飾され、カロンのような文様が表現されている。かつてこれらの伝統衣装や贈与品はロングハウスに居住する住民が作っていたが、近年ではロングハウスを離れ、

<sup>17</sup> 工業製品であるビーズが商品として取引される過程で世界各地の先住民の伝統的な手工芸品に多大な影響を与えることについては、しばしば研究の対象となっている (e.g. Sciamia & Eicher 1998, Munan 2005)。これはグローバルなレベルでの市場や世界規模での観光客の消費動向や出身地の変化が、いかにしてローカルな手工芸品の制作や土産物の販売に影響を与えているのかという問題意識の研究と共通している (e.g. Wherry 2008, Winter 2009)。

<sup>18</sup> ボルネオ先住民諸社会におけるビーズの社会的価値やその使用方法、交易を通じた入手方法についてはしばしば研究されてきた (e.g. Alexander & Alexander 1995, Janowski 1998)。

伐採キャンプや都市部で出稼ぎをする人や移住してロングハウスを離れる人々が増加しているため、伝統衣装やビーズ細工を作る人が激減している。だが現在でもサラワク先住民の多くがキリスト教式の結婚式と同時に各民族の婚姻儀礼も行っているため、伝統的な衣装やビーズ細工などの贈与品の需要は減少していない。この需要を満たすために、サラワク先住民の中には現在では、ミリ市の手工芸品販売センターのような、観光施設や土産物店を訪問し、そのような店で販売されている品々を購入し、儀礼の場で使用している（市川 2014, 2015）。JS 氏夫婦による手工芸品の制作と販売も、近年のサラワクにおけるこのような社会状況の中でなされているのである。

#### 4. 考察：芸術活動、教育、観光業

JS 氏のライフヒストリーから見て取れるのは、彼や彼の配偶者が行っている伝統的な文様を用いた手工芸品の制作とは、伝統的な村落におけるサブシステム経済活動の中で習得したのではなく、また地域コミュニティや親族集団の中で継承してきた技術や知識を村落での生活の中で学んだのでもなく、生まれ育ったロングハウスの外部社会や学校教育、教員としての勤務、都市生活の中で学習されてきたのだという点である。例えば JS 氏は少年時代に学校教育を受けるために自己の生まれ育ったロングハウスを離れ、その後も学校での教育や他地域での勤務や都市生活を続けていたため、実質的にロングハウス外での生活のほうが長期間に渡っている。彼は現在でもクリスマス等の機会にロングハウスに戻り親族を訪問してはいるが、基本的な生活の場は都市である。彼の職業も学校の教員や企業の従業員である。このような生活を送る過程で、赴任先の建物に描かれた伝統的な文様に興味を持ちそれをスケッチして、自らも伝統的な文様を描けるオジに見せてアドバイスを受け、さらに練習することにより習得したという JS 氏の経歴には、オジから伝統的な文様を学んだとはいえ、村落生活で親族から生活の過程で学んだというよりも、むしろ自己の生まれ育ったコミュニティの外部で改めて学習した、という性格が強くみられる。

また JS 氏の配偶者である LL 氏も、やはり生まれ育ったロングハウスでビーズ細工を学んだのではなく、少女時代にロングハウスを離れて暮らした寄宿学校でビーズのクラスを受講することによりビーズ細工の基礎を学び、JS 氏と結婚してからは夫が習得した伝統的な文様を学ぶことにより新しいデザインや作品を生み出したという点で、やはり JS 氏と共通している。いずれも村落部での生活ではなく、村落を離れた地で伝統的な手工芸品の制作技術を身に付けたという部分で類似しているのである。現在、LL 氏は彼女が作るビーズ細工の顧客も多いことから、サラワク州全体の手工芸品制作者を統括する団体であるサラワク手工芸品協会（Sarawak Craft Council）のメンバーになっており、ミリだけでなく州都クチンにも定期的に行き、ビーズ細工を制作販売している。彼女が制作するビーズ細工は、いわゆる「伝統的」なモ

モチーフが用いられているが、これらも JS 氏と同様、村落部での日常生活や、親族関係を通じて覚えたのではなく、外部での生活の中で学習したものである。他に職業を持ちながら、自己の好みに従い、必ずしも販売する目的ではなく技術や技法を学ぶという点で、JS 氏と LL 氏の活動は、生業とは異なっており、むしろ都市住民の芸術活動に近い性格を持っている。実際に JS 氏はもともと販売するために手工芸品を作ったり伝統的な文様の勉強を始めたわけではなく、自らがそのような制作活動が好きだから行って来たという部分が強い。また LL 氏の経歴にも、そもそもビーズ細工が好きで他に仕事がある際にもビーズ細工を続けたため、たまたまミリで手工芸品販売の機会があった際にそれに応募できたという特徴がある。

このようにして JS 氏や LL 氏が習得した伝統的な手工芸品の制作技術とその作品は、主に自己目的としての芸術活動のために作られると同時に、観光客や地元住民を対象として観光施設でも販売されるという特徴もある。前述のように、現在のサラワク州における主要な観光の形態は熱帯雨林という自然環境を対象としたエコ・ツーリズムと、域内各地に居住する多様な先住民の文化を観光資源としたエスニック・ツーリズムである (e.g. Zeppel 1998, Bratek, Devlin & Simmons 2007, Harris 2009)。サラワク先住民の伝統的な生活形態は熱帯雨林内部のロングハウスでの居住であるため、上述した二つの観光形態は実際には密接に関わりあっている。中でもサラワクの諸先住民の制作する手工芸品は、エスニック・ツーリズムの一環としてマレーシア国内外の観光客にとって主要な土産物として人気が高く、また先住民にとっては観光土産としての手工芸品制作は観光業への主要な参入方法のひとつになっている (e.g. Berma 2001)。ミリの手工芸品販売センターもそのような観光客を対象として設立されたものであり、JS 氏夫婦もそこで自分たちの作品を販売している。だが JS 氏も LL 氏も、自己の手工芸品を制作するにあたり、購買者である観光客の好みに合わせた作品を作ろうという意識は希薄である。むしろ「自分たちの好みに合った作品を作り、もし顧客がそれを求めるのであれば売る」といったスタンスが強い。

このような状態は、従来の観光文化を対象とした多くの研究が取って来た、ゲストとしての観光客とホストとしての地域住民との相互交渉の中で、ホストがゲストの期待や要求に応じて土産物品を作成する現象を取り上げる視点や、逆にホスト側が自己のアイデンティティを外部に主張するために観光の場で手工芸品のモチーフを利用するといった現象に注目する視点では十分に説明できない。むしろ、JS 氏や LL 氏の活動からは、生まれ育った地の外部で、自己の好みに従い学習した技術や知識に従って作り出した作品を、自己の芸術活動としての目的に使用するだけでなく、観光業というビジネスの場にも持ち出しただけであることが見て取れる。

もちろんサラワク州全体を見た場合、必ずしも JS 氏と LL 氏のような事例だけが存在するのではなく、観光業のために伝統的な作品を制作し販売する人々も存在することは否定できない。だが従来の観光文化を対象とした研究は、観光の場で観察される観光土産とその制作者を、過度に観光の文脈に位置付けて理解しようとするあまり、観光とは直接関係ない、あるいは観光

を取り巻くより広い社会的文脈を軽視してきたのではないか。上述のライフヒストリーの検討からも明らかのように、手工芸品販売センターで妻とともに自己の作品を販売し、また現在も積極的に伝統的な手工芸品を制作する JS 氏にとって、手工芸品の制作は石油会社での労働という「本業」を行っただけの余暇活動であり、さらにそれも学齢期を過ぎてから生まれ育ったロングハウスの外で改めて学習し習得したものである。いわば教員として村落を離れて生活した経験や、企業で働く都市住民としての JS 氏の生活こそが、一見、観光業を志向しているようにも見える伝統的かつエスニックな手工芸品の制作活動を成り立たせているのである。さらには JS 氏にしても LL 氏にしても、これらのエスニックな手工芸品の制作活動は、村落部で習得したというよりも、村落の外部、特に都市部で教育を受けることにより習得したという部分が強い。本稿が行ってきた、エスニックな手工芸品の特徴を理解するために、その制作者の本業や教育歴、芸術活動といった具体的な生活を視野に入れて分析するという研究は、エスニックな手工芸品およびそれに関わる人々を観光の場にも位置づけ、過度に観光の脈絡を重視してしまうという、観光研究が陥りがちな近視眼的な分析枠組みを避け、より広い社会的背景の中で研究対象を理解する方途につながるといえるだろう<sup>19</sup>。

## 参考文献

Adams, Kathleen

2009 Indonesian Souvenirs as Micro-Monuments to Globalization and Modernity: Hybridization, Deterritorialization and Commodification. in Michael Hitchcock, Victor King and Michael Parnwell (eds.) *Tourism in Southeast Asia: Challenges and New Directions*. Honolulu: University of Hawaii Press. pp.69-82.

Alexander, Jennifer & Paul Alexander

1995 Commodification and Consumption in a Central Borneo Community. *Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde*151(2):179-193.

Berma, Madeline

2001 Constraints to Rural Community Involvement and “Success” in Non-agricultural Activities: Some Evidence from Sarawak, Malaysia. *Humanomics*17(1/2):99-115.

Bratek, Oswald, Pat Devlin & David Simmons

---

<sup>19</sup> 本稿が依拠するフィールド・データの収集にあたり、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「マレーシア、サラワク州における在地の社会関係と観光開発に関する研究」（代表者市川哲、研究課題番号：23710308）、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「東南アジア熱帯域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究」（代表者：石川登、研究課題番号：22221010）、文部科学省科学研究費補助金プロジェクト「東・東南アジア地域におけるツバメの巣取引の多現場民族誌的研究」（代表者：市川哲、研究課題番号：26360028）からの援助を受けた。現地調査では JS 氏、LL 氏およびミリの手工芸品センターのメンバーから多大な協力を得た。ここに明記し深謝いたします。

- 2007 Conservation, Wildlife and Indigenous Tourism: Longhouse Communities in an Adjacent to Batang Ai National Park, Sarawak, Malaysia. in Butler, Richard & Tom Hinch (eds.) *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*. Oxford: Elsevier. pp.142-157.
- Cave, Jenny, Lee Jolliffe and Tom Baum (eds.)
- 2013 *Tourism and Souvenirs: Global Perspectives From the Margins*. Bristol, Buffalo and Toronto: Channel View Publication.
- Cohen, Eric
- 1988 Authenticity and Commoditization in Tourism. *Annals of Tourism Research*. 15:371-386.
- Graburn, Nelson H. H.
- 1999 Ethnic and Tourist Art Revised. in Ruth B. Phillips & Christopher B. Steiner (eds.) *Unpacking Culture: Art and Commodity in Colonial and Postcolonial Worlds*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press. pp. 335-371.
- Harris, Roger W.
- 2009 Tourism in Bario, Sarawak, Malaysia: A Case Study of Pro-poor Community-based Tourism Integrated into Community Development. *Asia Pacific Journal of Tourism Research* 14(2):125-135.
- Hitchcock, Michael, Nguyen Thi Thu Huong & Simone Wesner
- 2010 Handicraft Heritage and Development in Hai Duong, Vietnam. in Hitchcock, Michael, Victor King & Michael Parnwell (eds.) *Heritage Tourism in Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press. pp.221-235.
- Michael Hitchcock, Victor King and Michael Parnwell (eds.)
- 2009 *Tourism in Southeast Asia: Challenges and New Directions*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hume, David L.
- 2014 *Tourism Art and Souvenirs: The Material Culture of Tourism*. London & New York: Routledge.
- 市川哲
- 2014 「マレーシア、サラワク州における手工芸品研究のための覚書：観光と民族関係の接合」『立教大学観光学部紀要』16:136-146.
- 2015 「マレーシア、サラワク州の観光と手工芸品：土産物店を利用する先住民」『交流文化』15:16-21.
- Janowski, Monica
- 1998 Beads, Prestige and Life among the Kelabit of Sarawak, East Malaysia. in Lidia D. Sciamia & Joanne B. Eicher (eds.) *Beads and Bead Makers: Gender, Material and Meaning*. Oxford,

New York: Berg. pp. 193-212.

久保忠行

2014 「タイのカヤン観光の成立と変遷：観光人類学の枠組みを再考する」『東南アジア研究』51(2):267-296.

Muman, Heidi

1989 *Sarawak Crafts: Method, Materials, and Motifs*. Oxford, Singapore, and New York: Oxford University Press.

2005 *Beads of Borneo*. Kuala Lumpur, Singapore & Paris: Editions Didier Millet.

Picard, Michel & Robert E. Wood (eds.)

1997 *Tourism, Ethnicity and the State in Asia and Pacific Societies*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Sciama, Lidia D. & Joanne B. Eicher (eds.)

1998 *Beads and Bead Makers: Gender, Material and Meaning*. Oxford, New York: Berg.

Smith, Valene (ed.)

1989 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

山下晋司

1999 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版社。

Wherry, Frederick F.

2008 *Global Markets and Local Crafts: Thailand and Costa Rica Compared*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

Winter, Tim

2009 Destination Asia: Rethinking Material Culture. in Tim Winter, Peggy Teo & T. C. Chang (eds.) *Asia on Tour: Exploring the Rise of Asian Tourism*. London & New York: Routledge. pp.52-66.

Zeppel, Heather D.

1998 Entertainers or Entrepreneurs: Iban Involvement in Longhouse Tourism (Sarawak, Borneo). *Tourism Recreation Research*. 23(1):39-45.

2006 *Indigenous Ecotourism: Sustainable Development and Management*. Wallingford, Oxfordshire, Cambridge: CABI.